

為替取引と外貨預金 FX取引

07E0106 藤戸 啓太

1、為替レートを理解するために

1, 1 為替と外国為替について

取引相手が離れた場所に住んでいた時に取引決済するとき現金でのやり取りは額が大きくなるほど危険です。送ろうとする際にも送料などのコストがかかります。

しかし離れた双方が銀行口座をもっているとします。この場合には手持ちの現金や口座の預金残高を相手方の口座に入金することで簡単になります。これには、現金を相手方の口座に入金したり送金する「払い込み」があります。また口座から相手の口座に送金する「振り替え」があります。

もし口座がない場合でも送る手段はあります。その方法はまずお金を窓口を持って行き普通為替証書、定額小為替証書を発行してもらいます。普通為替は500万円以下で自由に発行してくれますが、3万円未満で420円、以上で630円の手数料がかかります。

定額小為替は100円の手数料で50、100、200、300、400、500、1000円の七種類の定額小為替証書があります。発行してもらった送金者は、相手に郵送なりして届け受け取った方はゆうちょ銀行の窓口で持参して記載の金額を受け取ることができます。狭い意味これらの送金所に利用される手形、小切手、証書を為替といいます。

離れた地域に住み取引決済をするとき現金の輸送をとまわずに金融機関の仲介により債権、債務する方法を為替といいます。

外国為替とは、国境を越えた債権、債務関係を決済するもので具体的には外国通貨の売買や交換を意味します。異なる通貨を交換する比率を外国為替相場、あるいは為替レートと言います。

為替レートは1ドル100円とか1ユーロ150円などドルやユーロなどの外国通貨を円で買う交換比率をあらわしています。

1, 2 円高と円安について

ガソリンが1リットル120円が150円となればガソリン価格は高くなり100円になれば価格は下がっています。同じように1ドル100円で交換されていたレートが130円となればドルの価格が高くなり90円となれば、ドルが安くなっていることがわかります。これみたいに、外国通貨1単位について交換に必要な円貨をあらわした金額を「自国通貨表示」あるいは「自国通貨建て」、「邦貨建て」外国為替レートといいます。

(ここでの邦貨とは円です。)

為替レートの表示方法はレートの「建て方」ともいいます。

1単位の外国通貨を自国通貨をあらわす方法(直接相場提示)と
1単位の自国通貨を外国通貨で表示する方法(間接相場提示)があります。

表示方の例は1USD(アメリカドル) = 112.55円なります。

クォートには午前10時前に公表されるTTMがあります。

クォートとは取引相手に売買価格やレートを表示することです。

TTMとは中値のことで10時前の銀行の相場が基準となり原則1日中変更がありません。

1, 3 通貨表示の方法について

ドルを例にすると¥90/\$1.00と書いて1ドル交換するのに90円必要ということを示しています。すなわち円の表示価格が大きくなれば交換の際に円が多く必要ということになります。それは円の価値が減少しているということになります。

円とドルの交換比率は反比例関係にあります。このため円安が起きればドル高になり反対に円高になればドル安になります。

表示の縁家が増加するにつれて円の価値が下がり円安になります。

円安になればそれまで100円で購入できたものが110円必要になったりします。逆に円高になれば90円で買えるようになります。

1, 4 為替の取引について

外国為替相場は為替レートの別名でありそれには銀行間相場と対顧客相場の2つがあります。銀行間相場はインターバンクレートともよばれ銀行間の取引による外国貨幣の需給からきまります。

銀行はインターバンク相場で外国為替を取引して顧客と売買します。

顧客とは金融機関以外のドルの需給取引に関与している会社、団体、個人のことです。

インターバンクと対顧客相場の違いは外国為替の「卸」と「小売」に対応しています。金融機関は銀行間相場によって外貨を調達しその卸値に一定の利益などをつけて小売りに販売します。反対に一定の利益などを差し引いて小売りから購入し銀行間で売却します。

外国為替市場では土日祝日を除き24時間どこかの市場がひらかれています。

これらの市場ではロンドン市場、ニューヨーク市場及びアジア市場が取引市場として規模が大きくなっています。

かつては東京市場が三大市場としてされていましたが使い勝手の悪さ市場の整備不良から脱落してしまいました。

1. 5 ビッド、オファー、ツーウェイ・クォート・ルールについて

外国為替取引は、金融機関(主に銀行)同士が取引をするインターバンク市場、銀行と顧客による対顧客市場、および顧客同士の取引による市場から構成されています。インターバンク市場の参加者は、取引を開始してレートの提示を求められた場合、買い取り価格と売り渡し価格の双方を同時に伝える慣例があります。これは、オファー・ビッド方式とかツーウェイ方式とよばれます。例えば、1 \$=¥110.50-55 などと表示されます。これは、110 円 50 銭であれば買いたい(ビッド)、110 円 55 銭であれば売りたい(オファー)という取引条件が示されています。為替レートとは、このとき提示された買値(ビッド: Bid)と売値(オファー: Offer) レートを指します。

インターバンク取引は、必要に応じて金融機関同士が金銭的に見合うように融通しあう取引をしており、市場取引ではなく相対取引です。売り方と買い方が相互に不利益にならないように、レート提示銀行の買値(ビッド)と売値(オファー)を両方同時に伝える「ツーウェイ・クォート(プライス): Two-Way Quote (Price)」でレートを提示するルールがあります。取引相手は取引したい通貨の種類と量を伝えるのみで、売買に応じる者は取引相手が売りたいのか買いたいのかわからない状態で、買い取り価格と売却価格の両方を同時に提示するのが慣例となっています。なお、取引の相手方に売買価格やレートを提示することをクォート(quote)と言います。

例えば、X 銀行がまとまったドルを買いたいと考えて Y 銀行を呼び出したとき、初めから買いたいという意味をあらわしません。そして、ルールにより、Y 銀行は買いと売りの両方のレートを示さなければなりません。つまり、これはオーダーを出す側と受ける側を対等にするルールです。注文を出すときには、予め買いか売かわからず、レートだけ先に提示させるところが肝心です。

なお、ビッド価格は常に先に示され、オファー価格より低くなります。なぜなら、この相場(レート)を建てているディーラーは、ドルを低いプライスで買い(ビッド)、高く売る(オファー)ことにより利益を得るからです。この差額もしくは利益は、ディーラーのスプレッド(値幅)とよばれます。また、買いと売りのレートはプライスとよばれます。

さて、ドル・円レートはいくらかを問われたら、例えば、120.00-05 と提示します。相手がドルを売るなら 120.00、買うなら 120.05 とこちらから見た買値と売値を同時に伝えなければなりません。この時、取引相手はこちらからドルを買い入れて(120.00)、誰かに転売(120.05)することによって、1ドル当たり 0.05 ドルの利益が出ます。したがって、ビッドとオファーの差額は、取引業者

の利益となるわけで、この差額が大きい業者は為替業務から多くの手数料を取っていることになります。差額が大きいようであれば、不利益を被らないように、他の手数料の安い業者を探すことが賢明となります。また、買値と売値の開き、あるいは差額をスプレッド (spread) と言います。スプレッドには“開き”そのものの意味があります。また、スプレッドが広がれば、大きな利益を要求することと同じで、取引相手としては敬遠されることになります。

ツーウェイ・クォートの機能を考えてみましょう。例えば、市場の実勢 (実際に売買されている) レートが $120.00-05$ とします。実勢レートより円高ドル安方向でレートを提示すると、例えば $119.95-120.00$ をクォートすれば、大量にドルが買われます。注文者は大量のドル買い注文を出し、安く買って実勢価格で売却すればよいわけですから、 $120.00-119.95$ で1ドル当たり 0.05 円の利益が労せず入手可能です。

反対に、円安ドル高として $120.05-120.10$ をクォートすれば、大量の円を売りつけられることになります。この価格表示方により、巨額の外貨資金が瞬時に移動することになります。ただし、FX 取引のように、売り方も買い方も同一の取引相手のみより売買取引ができない仕組みであれば、ツーウェイ・クォートのメリットはほとんどありません。単に市場実勢に近いと称するレートを提示されるだけです。しかし、買値 (ビッド) と売値 (オファー) の差額の大きな業者は避けましょう。また、ツーウェイ・クォートでレートを提示しない業者とは、絶対に取引してはいけません。

1, 6 TTM、TTB、TTSについて

為替取引は 24 時間どこかの市場で為替取引が行われ、インターバンク間の為替相場は常に変化しています。レートは時々刻々と変わりますからそのまま対顧客市場に提示することは困難です。また、先にも述べましたように、外国為替取引は相対取引で、市場型取引ではありません。円と外国通貨の需給額は、取引によって千差万別で、取引機会の時間帯は営業時間帯の中とは限りません。したがって、必要額とその時間に応じてブローカーかディーラーあるいは持つてそうな誰かと直接取引をする相対型取引となります。

しかし、銀行が顧客に対してその日の基準となる相場を決める必要があります。それは、仲値 (T.T.M. : Telegraphic Transfer Middle Rate) と言います。仲値 (中値ともいう) は、その日の午前 9 時 55 分の銀行間スポット (直物) 相場が基準となり、原則として 1 日中変更がありません。しかし、投機的な為替レート変動などから変動幅が大きい場合や銀行間相場が 2 円以上の幅で変動したとき、午前 10 時前に公表された相場は変更されます。これをサスペンド (公示相場適用停止) と言います。TTM は、1 ドル=100.95 円から 1 ドル=101.05 円とすれば、中間をとって 1 ドル=101 円ベースレートとなります。公表仲値は、1990 年以前は外国為替専門銀行である東京銀行が決定した値で全国一律でした。東京銀行と三菱銀行が合併して普通銀行となった後は、外国為替銀行法により免許を与えられた外国為替取引専門銀行が無くなってしまったので、TTM は各取扱期間が自由に決めることが可能となりました。これは FX 取引については重要で、購入取引会社の表示する TTM レートが市場実勢と等しいかどうかは、必ずチェックしておかねばならないことです。また、中値は単に真ん中のレートという意味合いが強く、為替取引は相対取引によることから、金融機関によりばらつきがあることに留意しなければなりません。

電信取引の場合は、立替金利が発生しないので、手数料のみを考慮したレートとなります。公示仲値に、マージンや銀行利益を含む銀行売買手数料を上乗せしたのが TTS で、差し引いたのが TTB です。TTS は、電信、郵便、小切手送金、輸入ユーザンスの決済、TTB は輸出為替の買取、被仕向送金などに適用されます。

1, 7 貿易取引の為替決済・A/S・ACC

信用状付一覧払輸出手形決済相場 (A/S) と信用状付一覧払輸入手形決済相場 (ACC) は輸出入を荷為替手形という手形で決済する時に適用されるレートです。

輸出決済を例にとれば、100万ドルの輸出契約をした日本企業A社は、代金支払い保証のために銀行の保証を要求します。これに対して、アメリカの輸入企業B社は、アメリカ国内の取引銀行Xに、100万ドル分の支払いを取引銀行が負うとする「信用状 (L/C : Letter of Credit)」の発行を依頼します。

X銀行からの信用状は、日本国内の取引Y銀行を経由してA社へ通知されます。A社は輸出代金の決済のため、船積書類と荷為替手形を提示して、Y銀行に荷為替手形の買取請求を行います。荷為替手形には船積書類が添付されており、提示された相手方は100万ドルを支払わなければなりません。ここで、提示の一覧 (目を通すこと) から、支払いに応じねばならないので一覧払手形といいます。この100万ドルの荷為替手形を円に換えるときに適用される為替相場が、一覧払手形買相場 (信用状付一覧払輸出手形決済相場の別称) です。買相場の「買い」という意味は、銀行が輸出代金の100万ドル分のドルを買うところにあります。

対顧客相場について

対顧客市場の参加者は4つに分けられます。1は商社、自動車、電気関連企業、石油などの一般事業法人。主に「実需」として貿易に伴う取引や投機目的で参加。2は生命保険、損害保険、投資信託などの機関投資家。しばしば外国為替市場に及ぼすほど大規模。3はヘッジファンド。これは少人数の投資家化から資金を集め法律の規制を避けながら債券、株式、デリバティブ、外国為替に運用する集団。ここで売り浴びせや買いにより1国の通貨が信用不安になった例がある。最後は投資家で外貨預金、FX取引の為替予約や投機取引、海外旅行の外貨両替の処理など小額の取引と投資を個人レベルで行う事。

以上の4つです。

1、8 相対の為替取引と市場取引の先物

ここで F X 取引為替レート手数料について説明します。F X 取引は、相対取引がベースの為替取引と、市場型取引がベースの先物取引が融合した取引です。

よって異なる取引の形態から相互に矛盾した状況も発生します。

例えば相対（顧客と金融機関が 1 対 1 で取引）で取引量とレートを個別に決定していくので為替レートは取引状況の内容が強く反映されます。一方先物取引は商品が規格化しており市場参加者には同一の価格条件が提示されます。

この価格によって値洗いという時価評価が行われ先物買い手と売り手の証拠金残高の変動から投資の損益が確定します。よって為替レートは会社毎に個別に決めているが取引参加者にはあたかも市場全体で同一のレートかのように提示されるという F X 取引ならではの奇妙な状況がはっせいしています。

さらに先物取引では投資家の将来判断により利益と損失の確定を行い契約満期前に反対売買によって取引を精算します。

この時買い付け予約が転売時点で値上がりしているか、売りつけ予約が買戻時点で値下がりしていれば理恵家がでます。これは先物取引では一般的である

「差金決済」といいます。これに対して契約完了の日を行う決済を「受渡決済」といいます。しかし例えば 1 枚 1 億円の債券先物を 100 万円の証拠金差し入れから 3 ヶ月の期間について先物取引を始めて最終日を待って授受を完了して 1 億近辺の先物価格金額を用意して債権を受け取る事はあり得ないことです。理由は 1 億を保証金 100 万円に 100 分割すれば 100 枚の債券先物取引が可能となり 1 億の取引が可能になるからです。これは先物取引の効果レバレッジです。先物取引をする人には対象商品をあらかじめ決められた価格で将来の価格変動から独立して確保しときたい場合もあります。しかしその多くはあえて、リスクを負い不確実な高い収益をねらったものです。

F X と理非においても同じです。例えば将来の海外旅行にそなえ外国為替取引を行うためではありません。変動による差益と自国と外国の金利差を獲得するのが目的です。

したがって F X 投資家は実際ドルを求める必要は無く帳簿上で確定した利益を求める事になっています。実際 F X 取引はドルを求める前に利益や損失を確定する取引なので両替手数料とは無縁なのです。

F X 取引はドルを手元に求めるものではない。

1 回目発表意味不明な語句たち。。。

為替・・・為替手形や小切手、郵便為替、銀行振込など、現金以外の方法によって、金銭を決済する方法の総称である。

為替レート・・・為替手形や小切手、郵便為替、銀行振込など、現金以外の方法によって、金銭を決済する方法の総称である。

自国通貨表示・・・外国通貨 1 単位について交換に必要な金額。

直接相場提示・・・外国通貨を自国通貨であらわす方法。

間接相場提示・・・自国通貨を外国通貨で表す方法。

クォート・・・取引相手に売買価格を表示すること。

T T M・・・中値のこと。

外国為替相場・・・為替レートの別名。

銀行間相場・・・インターバンクレートともよばれ銀行間の取引による外国貨幣の需給からきまる。

顧客相場・・・会社、個人、団体の相場。

インターバンク・・・銀行のみが参加し短期資金や外貨を取引する市場のこと。

オファービット方式・・・買取価格と売り渡し価格を同時に伝える。

ツーウェイ方式・・・同上。

ビッド・・・～なら買いたい。

オファー・・・～なら売りたい。

スプレッド・・・買値と売値の差額。

サスペンド・・・10 時前に公表された相場が変化する事。

金利・・・利子のこと。

マージン・・・手数料

デリバティブ・・・伝統的な金融取引（借入、預金、債券売買、外国為替、株式売買等）や実物商品・債権取引の相場変動によるリスクを回避するために開発された金融商品の総称である。

外貨預金・・・一般に、外国為替銀行に預ける外貨建ての預金のこと。また、外貨資金運用を補強するため、政府が手持ちの外貨の一部を、外国為替銀行に預金すること。

相対・・・顧客と金融機関が 1 対 1

差金決済・・・買い付け予約または売りつけ予約で利益がでること。

受渡決済・・・契約完了の日を待ち対象商品の授受を行う決済。

レバレッジ・・・経済活動において、他人資本を使うことで、自己資本に対する利益率を高めること、または、その高まる倍率。